

【令和5年度教育講演会】白石先生への質問とご回答

質問（原文のとおり）	ご回答
<p>改めて本校（参加者所属校）実践においても意味づけしていただいたような話も多く、とても励みになりました。教師が子どもがとらえる世界と一緒に味わえるのか、寄り添い、見守りながら子どもの発達の支えとなる大人でいられるのが大事だと思いました。一方で、評価の難しさも感じています。学習指導要領が改定され、できることが重視され「味わう」「楽しむ」といった評価が教師の主観と捉えられ、書きにくくなっている学校も多いようです。本校では学部の集団論議を経て、一定の共通の理解のもとで評価として書くことを大切にしていますが、指導要領に書かれてある一般的な評価の例を簡潔に書くより、エピソードとして書かないと、その子らしい評価とはならないように感じています。発達保障の考えを大切にしながら評価を書くにはどのようにしたらいいのか、先生の考えをお伺いできればと思います。</p>	<p>そうですね。大切なご指摘ですね。また、貴校において、学部の集団論議を経て評価を記入されているとのこと、このことが本当に重要だと思います。そうした集団論議があることで、「評価とは何か」「この学校では、評価として何を大事にするのか」を常に検討し、教師間での共通認識をつくっていくことにもなるのだと考えます。</p> <p>ただ、どうしても「評価表」や「個別の指導計画」に書けることは限られます。それだけでは教師集団としても保護者との間でも子どもの姿やねがいを共有できないと思います。「評価表」等のありかたとあわせて、どう具体的に伝え合うか、保護者との懇談のありかたの検討や、授業実践研究やケース研究的なことを続けていくことが重要ではないでしょうか。</p>
<p>白石先生がとても子どもをいとしい目を見てひとりのエピソードを大切にご指導されているのを感じました。</p> <p>「おはなしあそび」についてもっと詳しく知りたいと思いました。深く知るためにはどういったところにあたるとよいでしょうか。ご講演で紹介された羽田先生のご本でしょうか？</p>	<p>羽田千恵子さんの本はぜひ一度お読みいただきたいです。障害のある子への実践としてまとめられているものとして貴重だと思います。</p> <p>あとは、保育関係の実践から学ぶことも多いです。</p>

質問（原文のとおり）	ご回答
<p>「思いをつくる」という言葉が印象に残りました。思いは自然発生的に生まれる、溢れる、つくられる等と考えていたので、「つくる」と能動的に表現されていたことに意図があるように感じました。なぜ「つくる」なのでしょうか？</p>	<p>ご指摘のように、無理やり子どもにつくらせるようなものではないと思います。ただ、思わず溢れ出たり、思いが育っていったりするのとはどういうときかを考えていくことで、教材や授業づくり、教師のかかわり方を検討していくことは大切だと思います。</p> <p>また、発達的に幼い段階であっても、「もっとしたい」「こっちがいい」「うれしい」「いやだ」などの心の動きは必ずあると考えています。一見、自然発生的にみえるものであっても、そこに、その子自身のどのような価値観があるのかを子ども目線で考えようとすることで見えてくることもあるのではないのでしょうか。私自身、いつの間にか、おとなの“ものさし”だけになっていないか、いつも見直していきたいと思っています。</p>